

水の 話

FUJI CLEAN NEWS

no.
176

【特集】

川のまち、橋のまち。

川と橋とが築いてきた徳島の歴史と景観

【フジクリーンレポート】

Special Interview

株式会社三好浄化槽ネットワーク

代表取締役 田原 典郎 様

川のまち、橋のまち。



川と橋とが築いてきた徳島の歴史と景観

阿波の国・徳島は、瀬戸内海・紀伊水道・太平洋に面し、県全体面積の約8割を山地が占める自然に恵まれた地域です。中でも吉野川は、下流に肥沃な土壌を運び、広大な徳島平野をつくり上げた「母なる川」であると同時に、周辺に多くの洪水被害をもたらす暴れ川でもありました。しかし吉野川の流域に暮らす人たちは、次第に川を整備し、橋を架け、川とともに暮らしていきました。吉野川と橋の雄大な風景の中には、人と共生してきた多くの願いと歴史が刻まれているのです。



徳島県DATA

平成28年1月現在

〈人口755,162人 面積4,146.65km²〉

四国の東部に位置する徳島県は、山地が全面積の8割を占め、標高1,955メートルの剣山をはじめ一級河川の吉野川、大歩危・小歩危の深い峡谷、世界一の鳴門の渦潮など、まさに自然の宝庫です。また「阿波おどり」「阿波人形浄瑠璃」などの阿波文化や、「うだつの町並み」「四国八十八ヶ所霊場」の歴史が息づいています。近年は「藍染め」や「大谷焼」といった工芸においても国内外から注目を集めています。

対岸への切なる願いを叶えてきた橋の進化。

橋から生まれた世界の文明と歴史

古来より、川のあるところに人が集まり、さまざまな文明が生まれてきました。川の対岸に渡る術は、浅瀬の大きな石や倒れた木などから偶発的に生まれ、文明の発達とともに人工的に再現されていったと考えられます。史書で最初に現れる橋は、メソポタミア地方の古代都市・バビロンで、ユーフラテス川に架けられた橋だと言われています。ちなみに「メソポタミア」は「川に囲まれた土地」を意味し、「ユーフラテス川」は「立派な橋の架かっている川」を意味していることから、橋が文明の発展に大きく関係していたことが窺えます。

日本における最も古い橋は、326年頃、大阪に架けた猪甘津の橋と言われています。『日本書紀』には、4世紀末には仏教とともに大陸文化が到来し、多くの渡来人が技術を伝えたことと記されています。「日本3大古橋」と呼ばれる宇治川の宇

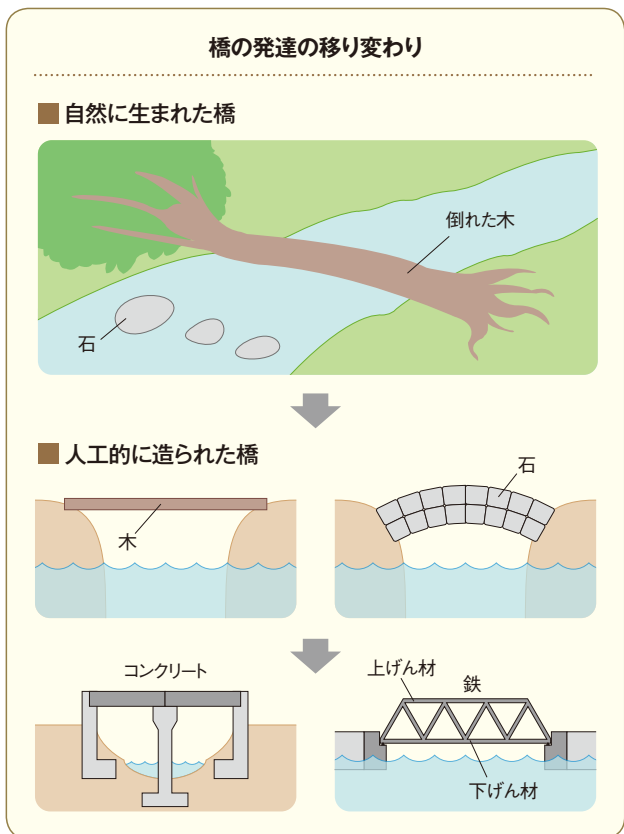
治橋、淀川の山崎橋、瀬田川の瀬田橋は、いずれも7世紀頃に架けられており、京の都に通じる交通の要となっていたことから幾多の戦場となり、多くの歴史がつけられた舞台でもあります。その後、日本で橋づくりが広がったのは江戸時代。徳川家康が架けた千住大橋や日本橋をはじめ、続く歴代将軍も両国橋、新大橋など約320橋を架橋しています。明治時代に入り、西洋の文化や技術が大量に取り入れられるようになると、国のインフラ整備が進み、橋の建設も各地で行われていきました。しかし当時造られたものの多くが木橋であり、日本の橋梁技術は国産の鉄が生産されはじめて、本格的に進化していきました。

20世紀前半になると、世界の橋梁技術は理論、材料、設計、施工とも格段の進化を遂げ、長大橋への挑戦が始まっていました。しかし日本では、1903年に初の鉄筋コンクリート

1: 吉野川の水面に影が映りこむ吉野川橋の夕景
2: 吉野川と徳島県市街(写真提供: 徳島県道路整備課)

橋が登場するものの、時代的に軍事優先と国力の貧しさから一般化への歩みは留まってしまいます。そして、1923年に起こった関東大震災が、日本において橋の質的向上の大きな転機となりました。地震による落下事故が少なかった一方で、木橋の火災による被害が甚大であり、唯一の鋼床版橋だった隅田川の新大橋は避難路となり多くの人命を救ったのです。この教訓により、木橋から永久橋*への転換が推し進められていき、1926年に阪神間の淀川大橋、1927年に当時東洋一の吊り橋と言われた徳島県の三好橋など画期的な橋が続々と誕生し、各地で高品質な橋文化が創出されていきました。こうして日本の橋梁技術は大きく発展し、現在日本では、70万橋以上の道路橋と10万橋以上の鉄道橋が私たちの暮らしを支えています。

*洪水による流出や火災により架け替えを行うことが普通であった木橋に対して、鉄・コンクリートで整備された橋のこと。



徳島県を流れる500の川と46の橋。

川のまち徳島は、橋の博物館

橋は、部材や構造で分類することができ、架けられる場所の地質や環境、求められる性能や経済性などからどのような橋を架けるかが決められます。そのため、さまざまな橋が存在していますが、多種多様な橋を楽しめるまちとして注目を集めているのが、徳島県です。徳島は、豊かな自然に恵まれた地域で、特に山間部からは、吉野川、勝浦川、那賀川など、水量の豊富な河川が多数流出しており、その数は大小合わせると約500を数えます。また県土の約8割を山地が占めているという地形から、道路の延長に対する橋梁延長の割合（橋梁率）が、大都市に続いて上位10位に入る“橋のまち”でもあります。中でも日本三大河川である吉野川には、昭和初期から2012年完成の阿波しらさぎ大橋まで、約90年間に46もの橋が架けられました。その雄大な景観だけでなく、多くの橋梁形式や時代を物語る最新工法を垣間見ることができることから、まさに「橋の博物館」と言うことができます。

四国三郎・吉野川による被害と恵み

吉野川は、徳島県を西から東へ流れる代表的な一級河川です。四国西部に位置する高知県の瓶ヶ森（標高1,897m）にその源を発し、四国4県、12市15町1村にまたがり、幹流延長は194キロメートル、流域面積は3,750平方キロメートルと四国全体の20%にあたる広さを占めています。吉野川は「四国三郎」と呼ばれ、「坂東太郎」の利根川、「筑紫次郎」の筑後川とともに、日本三大暴れ川の一つとして知られています。流域に降った雨がそのまま河川に流れ出た場合の河川流量、つまり基本高水流量が全国1位であり、かつては日本一の洪水地帯として流域の人々を悩ませていました。昭和初期までは、経済的にも技術的にも洪水を防ぐような堤防を築くことができなかつたため、吉野川が徳島平野一帯を編み目のように自由に流れていた様子が地図に残っています。

吉野川の治水事業は、明治時代から本格的に着手されました。現在の吉野川は、元々は別宮川と呼ばれており、明治の終わりから昭和にかけて人工的に整備された放水路です。当時の吉野川（現在の旧吉野川）は、毎年のように洪水を発生し、処理しきれない水が別宮川へあふれて川沿いの集落に深刻な浸水被害を及ぼしていました。そこで別宮川を吉野川の放水路として洪水を安全に流すために開削し、別宮川沿いに大堤防を築いたことで現在のよう吉野川本流になっていったのです。

また、被害とともに恵みもあり、吉野川の上流から肥沃な

土が運ばれたことによって、藍作が発展していきました。稲作は台風によって収穫前に流されてしまうことが多いのですが、藍は台風シーズン前の7月に収穫時期を迎えるため、安定した農作物としてこの地域に定着することができたのです。また本来、藍は連作に適していないのですが、刈り入れ後に土壌が洪水で流されることで連作を可能にしたようです。このように、吉野川流域の人々は、洪水と闘いながらも恩恵を生かし、うまく川と共存していったのです。

暮らしを変えてきた吉野川流域の橋物語

吉野川に堤防ができ、川が整備されたことによって、ついに橋の建設が可能になりました。それまでは、排水橋*をかけることが難しく、渡し船が対岸を行き来するための唯一の交通手段でした。「古川渡し」は河口から約5キロメートルの距離にあり、江戸時代の初期に始まったとされています。1886年に木造の「古川橋」がつけられたことで一旦は廃止されましたが、洪水によって橋が流される度に渡し船は活躍したそうです。

洪水による流出や火災による架け替えを行う必要のない「永久橋」は、吉野川流域に住む人々の悲願でした。1919年の道路法制定にともない、永久橋の架設に国費が支給されることになったため、徳島県では1921年に「11大橋梁架設計画」を策定しました。これは主要な道路で11の長大橋を架けようという壮大な計画でした。それにより、1927年に最初の永久橋となる三好橋が架かると、その後旧穴吹橋、吉野川橋が架けられました。いずれも日本を代表する橋梁技術者の増田淳氏による設計です。この3橋の完成によって、四国の中央部に位置する三好橋は他県との交流を活性化し、藍の集散地である脇町に架かる穴吹橋は藍の流通を盛んに、最も人口の多い地域に架かる吉野川橋は人や物の動きを助けるなど、暮らしに大きな影響を与えました。

しかしその後は、戦争により計画は立ち後れ、3橋の後に



長大橋が架かったのは1953年に完成した阿波中央橋となります。「吉野川橋」と「穴吹橋」のちょうど中間にあるため、「阿波中央橋」と名付けられました。戦後の貧困の中で、工事中に2回の台風に見舞われるなど苦労も多かったそうです。しかし地元の人々の復興への願いが込められた橋であり、当時は戦後架けられた橋では日本一と言われ、人々の大きな希望となった橋でもあります。

また吉野川流域の特長な橋として挙げられるのが、潜水橋です。潜水橋は沈下橋とも呼ばれ、洪水時に増水すると水中に潜ってしまい、水が引くと姿を現す橋のことをいいます。日本最大の川の中の無人島である善入寺島にかかる6橋は、すべて潜水橋となっており、遍路道として利用されています。元々は木橋で、洪水の度に流されていたためコンクリートに改修されました。安価でできるメリットがあり、またその素朴な佇まいは、今でも徳島の原風景として親しまれています。

そして吉野川流域で最も新しい46番目の橋が、2012年に完成した阿波しらさぎ大橋です。吉野川の最下流に架かり、橋長1,291メートル、川に架かる橋としては国内最大級で

す。また、右岸側の「斜張橋形式」と「ケーブルトラス形式」を組み合わせた、世界初となる「ケーブルイグレット」という形式を採用しています。これは橋のすぐ下流にある干潟に生息する生物や飛来する渡り鳥に配慮したもので、干潟部に橋脚を建てることのないように支間長を長くし、タワーを低くするとともにケーブルを並列に配置しています。また夜間照明も、歩道部を低い位置から照らすことで、橋の外へ光りが漏れないように工夫されています。吉野川を眺めながらの散歩やサイクリングなどにも利用され、吉野川河口域のランドマークとなっています。

*増水時などの高水位状態になっても沈まない高さに設けられている橋のこと。対義語として沈下橋がある。

■ 増田淳氏

1883年香川県高松市生まれ、1907年に東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業すると翌年、橋梁研究のために渡米。橋梁設計事務所などでの勤務を経て、1922年に帰国した後、各地の橋の設計に携わり、全国で約80もの橋を設計しています。架橋地点に合う姿かたちを最優先に考えながら、日本初となるようなタイプの橋を数多く設計したわが国を代表する橋梁技術者です。



- 1: かつて「古川渡し」があった場所として、吉野川付近に建てられた石碑
- 2: 吉野川に現存する8つ潜水橋の中で、最も下流に位置する高瀬橋
- 3: 吉野川に最初に架けられた三好橋
- 4: 戦後復興の象徴となった阿波中央橋
- 5: 阿波中央橋の親柱には「イサム・ノグチ」の作品であるモニュメントが載っています



- 1: 日本三大奇橋として、多くの観光客が訪れる祖谷のかずら橋
- 2: 勝浦川で開催されている「勝浦さくら祭り」。徳島県内では川を生かしたさまざまなイベントが行われています
- 3: 鳴門海峡に架かる大鳴門橋では、大迫力の渦潮が見られます
- 4: 徳島県で発行されている『とくしまブリッジカード』。橋を見に行った人が、その橋の写真を撮って指定のスポットで見せると、同じ橋のブリッジカードを無料でもらうことができます

【取材協力・写真提供・資料提供】

徳島県道路整備課 / 国土交通省四国地方整備局 徳島河川国道事務所

【参考資料】

徳島河川国道事務所 広報誌「Our よしのがわ」

橋の文化誌(三浦 基弘、岡本 義喬 著 / 雄山閣出版株式会社 発行)

日本の橋 多彩な鋼橋の百余年史(一般社団法人日本橋梁建設協会 / 株式会社朝倉書店 発行)

トコトヤとさい橋の本(衣田 照彦 著 / 日刊工業新聞社 発行)

日本の橋 その物語・意匠・技術(五十畑 弘 著 / 株式会社ミネルヴァ書房 発行)

橋とトンネルに秘められた日本のドボク(三浦 基弘 監修 / 株式会社実業之日本社 発行)

吉野川に生きる(吉野川に生きる会、ブレインワークス 編 / 株式会社カナリアコミュニケーションズ 発行)

橋の博物館とくしま WEBサイト

ランドマークとしても期待の高まる橋の魅力。

人が集う新たな観光スポットとしての役割

他にも、徳島県にはランドマークとして親しまれている橋が数多くあります。渦潮で知られる鳴門海峡を渡り本州と徳島を結んでいる大鳴門橋は、全長1,629メートル、主塔高が144メートルの吊り橋で、1985年に完成しました。上下2階構造になっており、上部が6車線の自動車専用、下部が新幹線規格の鉄道用となっています。周辺には、鳴門海峡に架かる大鳴門橋の橋桁内に造られた海上遊歩道や、記念館などがあり、大鳴門橋の雄大な姿を眺めるために多くの人が訪れています。

また昔ながらの橋を見ることができるのが、吉野川上流の祖谷川に架かる「かずら橋」です。かつて、渓谷が深いために往復できないでいた両岸の人々が、工夫の末に編み出した橋で、冬場の厳寒な山野で採取した自生の「シラクチカズラ」を編み連ねてつくられています。当時の人々には大切な生活路として、祖谷川各所にかけていたそうです。現在は3年に一度、村人によって架け替えが行われ、国指定重要有形民俗文化財にもなっている貴重な橋です。現在は、周辺が整備されており、大型バスやマイカーでも訪れることのできる観光スポットとして人気を集めています。

地域活性につながる美しい橋の景観

このように、橋は渡るものであるとともに、毎日眺められるものです。だからこそ橋は、インフラとして必要な機能性だけでなく、美しい景観にも配慮してつくられることが求められます。徳島県では、こうした美しい橋の景観にスポットを当て、2016年に「吉野川に架かる橋フォトコンテスト」を開催。このときに集まった素晴らしい写真の数々は、WEBサイト「橋の博物館とくしま」で公開されています。また、これらの写真を活用し、2017年からは46橋の『とくしまブリッジカード』を作成し、無料で配布しています。橋を徳島県の新たな観光スポットとしてアピールすることで、より多くの人に直接橋へ足を運んでもらい、地域活性につながることを期待しています。

吉野川沿いを歩いていると、同じ川と橋であってもそこに生まれる景観はすべて違うことに気がきます。橋は、他の建物とは異なり、骨組みだけでできているため、構造や部材を見ることができる貴重な構造物です。橋をじっくりと眺めていると、つくられた時代や技術の進化、そこに込められた想いなど、多くの声が届いてきます。だからこそ、橋と川との美しい風景は、いつしかそこに暮らす人々の“原風景”になって、心に残っていくのかもしれない。



あわあい 阿波藍

吉野川の恵みから生まれた、世界を魅了するJAPAN BLUE。



藍は、古より日本人に愛されてきた天然染料で、その深く鮮やかなブルーは「JAPAN BLUE」と呼ばれ親しまれてきました。中でも徳島県は、吉野川の肥沃な土壌によって日本最大の藍作地域として知られ、藍染めの元となる藍染料“すくも”づくりの本場として、現在もその伝統が引き継がれています。徳島県でつくられる“すくも”は「阿波藍」と呼ばれて、その高い技術から生まれた多くの藍染め作品は人気を集めています。近年では、Tシャツやジーンズなどのファッションに取り入れられたり、肌荒れや冷え性、アトピーなどへの効果が確認されるなど、活躍の場が広がっています。また阿波藍の藍色が「2020年東京オリンピック・パラリンピック」のエンブレムに採用され、ますます世界中から注目を集めています。

ここで体験できます



藍住町歴史館 藍の館

徳島県板野郡藍住町徳命字前須西172

☎ 088-692-6317

営業時間 / 午前9:00~午後5:00

定休日 / 毎週火曜日(祝祭日の場合は営業)、12/28~1/1

料 金 / [入館料]大人 300円、中・高生200円、小学生150円

[藍染体験]500円~

徳島県の伝統産業である「阿波藍」について、「見て」「触れて」「学ぶ」ことのできる歴史博物館です。大藍商であった旧奥村家屋敷が、1987年に藍住町に寄付されたのを機に開館。貴重な藍商屋敷の建造物や藍作の農具、美しい藍染め作品などが多数展示されているのははじめ、天然藍による藍染め体験も可能です。

Special Interview

2015年より、PFI方式による浄化槽市町村整備推進事業（以下「浄化槽PFI事業」）をスタートさせた徳島県三好市。このプロジェクトにける想いや今後の課題など、事業主体である株式会社三好浄化槽ネットワーク代表の田原氏にお話をお聞きしました。



市民、企業、行政、
みんなの意識改革こそが、
合併浄化槽の普及を加速させ、
美しい水環境を未来につなぐ。

株式会社三好浄化槽ネットワーク
代表取締役
田原 典郎 様

一 三好市が浄化槽PFI事業を導入した背景と、
この事業に参加した動機をお聞かせください。

私は、浄化槽の設置事業に携わっていく上で、以前より浄化槽の個人設置の難しさを感じていました。個人単位で補助金を申請したり、何十万円ものお金を払って合併浄化槽に転換するというのは、かなり面倒であり負担となります。また、浄化槽の設置業務は、コストダウンに対応できる大手企業に流出してしまい、地元企業が潤わない現状に疑問を抱いていました。以前は、浄化槽業界では価格破壊が起きていて、例えば適正価格を大幅に下回る価格で維持管理を請け負う業者が出てくるなど、価格競争は負の連鎖を起していました。その結果、本来やらなくてはならない清掃や検査を業者自らが省いて価格を下げ

始めてしまったのです。「水環境を守る」という本来の目的を失ってしまった状況を元に戻すためにも、市全体が関われる浄化槽PFI事業の実現を目指したいと考えました。

一 そのためにどのような取り組みをされましたか。

浄化槽PFI事業のデメリットとして、非常に内容が理解しづらいという点があります。ですから事業がスタートする1年くらい前に、私が代表となって勉強会を立ち上げました。当時は、徳島県環境技術センターの組合メンバーを中心に定期的に集まり、浄化槽PFI事業について検討しました。合併浄化槽の設置が広まらない原因の一つは、一般市民、つまりは設置者の意識が育っていないところが大いなのです。しかし、業者自らがいないがしろ



豊かな自然に囲まれた三好市を流れる吉野川と祖谷口橋



勉強会や説明会を開き、浄化槽への理解を広めています

にしてきた設置の必要性を改めて伝えていくのは大変困難なことで、一企業がその流れを断ち切ることは、さらに難のあることでした。だからこそ、市全体が関わっていく事業にすればそうした問題もクリアになっていくのではないかと意見を周知し、この事業への理解を深めていきました。

一 事業スタートから3年が経過し、
浄化槽PFI事業の成果をどのように感じていますか。

数字だけで言えば、当初の目標設置基数には達していないのが現状です。ただ、数字だけを追って基数を増やすのではなく、しっかりとお客様の理解があって設置しなければ、今後も続いていかないと危惧しています。三好市の浄化槽PFI事業は16年という期間をいただいているのですから、16年後の将来を見据えて取り組んでいきたいと思っています。また、この3年間で改めて浄化槽PFI事業のメリットを感じたのは、ネットワーク28社のアイデアを結集できるところです。これまでは不可能だった難しい場所への設置なども、さまざまな意見を出し合うことで可能になります。事業スタート以来、設置を断念した案件はなく、いくら工事が難航しても、それはまた次への貴重な経験、財産になると感じています。そうやって各企業が成長していけることも、この事業のメリットだと考えています。

【 浄化槽PFI事業とは 】

合併浄化槽を「浄化槽市町村整備推進事業（市町村型）」として整備していくにあたり、民間事業者の資金、技術的能力、経営能力を活用し、行政に代わって浄化槽の整備促進を効率的に行います。所有は市となり、使用者から使用料を徴収し、維持管理や運営等を市が行うPFI方式で実施していきます。

※PFI = Private Finance Initiative [民間資本主義]

【 三好市の浄化槽PFI事業とは 】

四国のほぼ中央に位置する三好市は、2006年3月に池田町、井川町、三野町、西祖谷山村、東祖谷山村、山城町の6町村が合併して誕生しました。旧井川町と旧山城町が2005年より取り組んでいた浄

一 今後の課題はありますか。

先ほども申し上げたように、「意識改革」が最大の課題だと感じています。市民の方々の声を聞いてみると、合併浄化槽を設置しなければいけない、水を汚してはいけないという意識が低いんですね。合併浄化槽を設置した人が環境に良いことをしたと感じること、もしくは合併浄化槽を設置していないことを恥ずかしいと感じること、そうした意識改革こそが、今後、浄化槽事業が伸びていくための大切なステップだと思います。近年は、川の水質検査を独自で行っています。現状の川の汚れを理解することで危機感を持ってもらうだけでなく、合併浄化槽の設置によって水質が変化していけば、この地域の設置意識の向上につながるかと期待しています。もちろん、企業側の意識改革も必要で、設置いただいたお客様に「本当にいいことをしてくれました」という想いを、伝えていかなければいけません。私は将来、子どもたちが地元で働いて、お金を稼ぐことができる環境と、きれいな水環境のなかで暮らすことができるまちを残してあげたい。浄化槽PFI事業は、そうした地域の経済基盤と美しい環境を未来へつなげていく「地域創生」こそが、最大の目的であり役割だと考えて、強い意志を持ってこのプロジェクトに取り組んでいきたいと思っています。

化槽市町村整備推進事業「市町村型」を、2015年から三好市全域に拡大することになり、三好市では迅速な事業の推進を目指してPFI方式を採用しました。市内の16社を構成企業とする株式会社三好浄化槽ネットワークを設立し、純民間企業が事業主体となって工事の事前協議から施工、維持管理、使用料徴収まで一貫して市に代わって実施。設立後も参加企業は増え続けており、2017年の時点で、16社の構成企業と12社の協力企業で運営しています。所属企業は、「資材販売部」「工事施工部」「維持管理・清掃部」のいずれかのグループに所属し、兼務できない仕組みになっており、相互にチェック機能を持たせながら、企業間の平等性にも配慮しています。また合併浄化槽への転換に関する広報・啓蒙活動も積極的に行っています。



浄化槽設置後は、使用者が使用料を支払い、市が維持管理を行います。三好浄化槽ネットワークは市からの委託で、保守点検、清掃を実施しています



水質調査の様子

市民に水環境の大切さを伝える広報活動

設備

三好工場の電磁式ブロワ塗装設備ラインを一新しました

愛知県みよし市にあるフジクリーンの「三好工場」では、電磁式ブロワ塗装設備を一新し、2017年3月21日より稼働いたしました。半永久的に使用できるFRP製浄化槽に対し、空気を送り続ける電磁式ブロワは、電気機器のため修理や交換が必要となり、近年交換需要が拡大しています。

一方で、以前より離島や海岸沿いにおいて電磁式ブロワの塗装が大きくはがれるという指摘がありました。電磁式ブロワの設置場所は基本的に屋外であるため、雨水や塵などの侵入を防ぐなど、電磁式ブロワ内部の保護のために本体カバーの形状や塗装は重要です。そこで塗膜の傷や、材質のアルミダイキャストの腐食から発生する塗装はがれを防止するため、2016年10月より塗装仕様を刷新し、塗装の密着性、耐久性を大幅に向上させました。そしてこのたび、工場の設備も一新し、一連の電磁式ブロワ塗装を内製化し、より高品質な電磁式ブロワの生産力拡大を図りました。

フジクリーンでは、防塵・防水対策として、電気機械器具の外郭の保護等級試験を「(一財)電気安全環境研究所(JET)」に依頼し、防塵・防水性能に関する評価(IP試験)を行っています。(IP54取得)



IP試験風景

製品材質(アルミダイキャスト)に対する新塗装の仕様

- 1 塗装膜に対する改善**
製品材質への密着性向上および、融雪剤などに対する耐性の高い塗料に変更
- 2 塗装密着性の向上**
製品材質 casting時に付着する離型剤(油)を除去するため、洗浄作用の強い脱脂液に変更
- 3 製品材質の腐食に対する改善**
製品材質に化成処理を行い防錆効果の高い被膜を形成



電磁式ブロワ塗装設備



電磁式ブロワの塗装整備ライン

会員
サービス

フジクリーン維持管理ネットワーク 新規会員募集中 [参加無料]

フジクリーンでは、製品の品質向上とより良いサービスの実現を目指して、維持管理会社様との情報伝達を密にする維持管理ネットワークを拡充しています。ご登録いただくと、維持管理に役立つ情報や新製品の詳細情報を配信いたします。また、講習会や情報交換会の開催もご案内いたします。詳しくは、お近くの営業担当にお問い合わせいただくか、弊社ホームページよりご登録ください。

<http://www.fujiclean.co.jp/fujiclean/ijikanri.php>

1 維持管理や新製品など、役立つ情報を定期的に配信!

近年の浄化槽は機種によって、構造や維持管理方法に違いがあります。機種に応じた適切な維持管理方法や浄化槽・ブロワの普段の維持管理の現場で役立つ情報をお届けします。

2 維持管理上のご相談を承ります

維持管理上のお悩みがありましたら、お気軽に最寄りの弊社営業担当者にご相談ください。早期解決によりお施様とのトラブルが未然に防げます。

3 定期的に講習会なども開催します

近隣地域で開催する講習会をご案内いたします。講習会・情報交換会・工場見学などにも随時対応いたします。



現場講習会の様子

TOPICS



2017年 8月1日(火)~4日(金)
10:00~17:00 (ただし初日開館10:30、最終日閉館16:00)

会場：東京ビッグサイト(東京都江東区有明3丁目11-1)
主催：公益社団法人 日本下水道協会

入場料
無料



下水道展公式サイト内 フジクリーン紹介ページ



昨年のフジクリーンブース

フジクリーンの
ブースに、
ぜひお越しください!

もっと
motto!
広げよう

水環境をきれいに
する取り組み

愛知県西尾市
島を美しくつくる会



島民が一丸となって 佐久島の豊かな資源を守り育てていく。



アマモの移植活動の様子



(写真提供：島を美しくつくる会)

三河湾のほぼ中央に位置する佐久島は、豊かな自然と昔ながらの懐かしい集落の風景が残る島です。しかし高齢化や過疎化などの課題を抱えており、これらを解決すべく1996年に設立されたのが、島民で構成する「島を美しくつくる会」です。会は、佐久島の自然、風土、文化、歴史、産業など固有の資源を発掘し、磨き、将来的な経済発展を実現して自立した島への発展をめざし、「ひと里」「美食」「漁師」「いにしえ」の4つの分科会を構成しながら、島の活性化と美しい島づくりに取り組んでいます。

具体的な活動としては、島に残る古墳の周辺整備や、原風景を守るための黒壁の家並みの整備、伝統的な佐久島太鼓の保存を目的とした「佐久島太鼓フェスティバル」の開催など、多岐にわたります。中でも長年に渡って続けているのが、水質を浄化する働きのあるアマモ*を移植し、稚魚やアサリの生育に適したアマモ場を再生する活動です。これは、2001年に島の中学生が佐久島を豊かな海にしたいという願い

からスタートさせたもので、現在は島を美しくつくる会や多くのボランティアの方々に参加していただいています。近年は、愛知県から「あい森と緑づくり環境活動・学習推進事業交付金」を受けて、ゾステラマットを使用したアマモの定植活動にも挑戦しています。

2001年からは、アートによる島おこし事業を発展させた「三河・佐久島アートプラン21」をスタートさせ、多くのメディアに取り上げられるなど注目を集めました。2015年には、観光客はついに10万人を超え、若者たちが中心となって企画・運営した島マルシェ「39の市」が新たに開催され、新しい芽も息吹始めるなど、取り組みの成果も少しずつ現れてきています。しかし一方で、島民の人口増加については、依然厳しい状況が続いています。今後は、佐久島の大切な資源を守りながら、さらに遊休農地などの環境の整備を行い、より多くの定住者の確保を目標に取り組んでいきたいと思っています。

※浅海域に生息する海草の一種



美しい水を守る

フジクラン工業株式会社

本社 名古屋市中千種区今池四丁目1番4号 〒464-8613 TEL (052) 733-0325

<http://www.fujiclean.co.jp>

札幌支店 (011) 882-1222
東北支店 (022) 212-3339
東京支店 (03) 3288-4511
名古屋支店 (052) 733-0250
大阪支店 (06) 6396-6166
福岡支店 (092) 441-0222
盛岡営業所 (019) 604-2527
郡山営業所 (024) 944-7780

茨城営業所 (029) 839-2271
宇都宮営業所 (028) 625-4650
群馬営業所 (027) 327-5611
埼玉営業所 (048) 620-1424
千葉営業所 (043) 206-5171
新潟営業所 (025) 271-8668
山梨営業所 (055) 275-9300
松本営業所 (0263) 27-2080

岐阜営業所 (058) 274-1011
静岡営業所 (054) 286-4145
四日市営業所 (059) 350-0788
和歌山営業所 (073) 422-3634
広島営業所 (082) 843-3315
高松営業所 (087) 815-0682
松山営業所 (089) 967-6123
高知営業所 (088) 803-1520

佐賀営業所 (0952) 31-9151
熊本営業所 (096) 388-3571
大分営業所 (097) 558-5135
宮崎営業所 (0985) 32-3064
鹿児島営業所 (099) 257-3501
沖縄営業所 (098) 862-9533



発行 2017年7月1日

フジクラン工業株式会社「水の話」編集室